

# フィールドに行って何ができるのか？

## What can we do in the field work?

中川 奈津子<sup>1,2\*</sup>  
Natsuko Nakagawa<sup>1,2</sup>

伝 康晴<sup>3</sup>  
Yasuharu Den<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 日本学術振興会

<sup>1</sup> Japan Society for the Promotion of Science

<sup>2</sup> 千葉大学大学院 融合科学研究科

<sup>2</sup> Graduate School of Advanced Integration Science, Chiba University

<sup>3</sup> 千葉大学 文学部

<sup>3</sup> Faculty of Letters, Chiba University

**Abstract:** We discuss fieldwork methods that make happy both researchers and local people by contrasting the difference between the two authors' fields. As a case study, we report our experience in our fields (Ishigaki in Okinawa and Nozawa in Nagano) through interactions between local people. We contrast our methods depending on the goals, characteristics of the fields, and how we interact with the local people, suggesting what we can do for them.

### 1 はじめに

本発表では、筆者らの調査する2つの対照的なフィールドを例に、フィールドで研究者ができることに関して現地の人々とのインタラクションの中から得た感触を報告する。筆者らのフィールドである沖縄県石垣市と長野県野沢温泉村を例に、研究目的と方法論、調査地の特性、調査対象の人たちとの関わり方などについてフィールドごとの違いを対照し、現地の人々に何が還元できるか、研究者と地元の人々の双方にとって嬉しいフィールドワークとはどのようなものかを議論する。

### 2 調査地と調査方法

著者の1人・中川は、沖縄県石垣市において琉球諸語八重山語（主に白保方言）の研究を行っている。琉球諸語は、日本語と同系統にある諸言語である。琉球諸語はさらに、北琉球語派と南琉球語派に分かれ、中川が調査を行っているのは、南琉球語派の1つ、八重山語の白保方言である。対象となる文法項目（例えば助詞）に関して話者に直接質問したり、自然な発話データから用例を収集したりすることによって、文法を記述しようとしている。特に、話者が無意識に使っている文法項目は質問によって答えを得ることは難しく、自然な発話データを収録することが重要である。白保方言に関する文献は、

石垣 (1971), 中本 (1999), 中川ほか (2015, 印刷中) などがある。

もう1人の著者・伝は、長野県野沢温泉村において、祭りに携わる人々のさまざまな準備作業や行事の調査を行っている。野沢では毎年1月に道祖神祭り<sup>\*1</sup>と呼ばれる大きな祭りが行われる。これは「三夜講」と呼ばれる3つの年齢層100名程度の集団が中心となって運営される。10月中旬の御神木伐採、1月13~15日の御神木里曳き・社殿組み・祭り本番などが主な作業・行事である。伝らの調査チーム（最大時7名程度）は、これらの作業・行事の一部始終をビデオ収録している。従来の文化人類学・民俗学的な祭りの研究（例えば古家ほか2009, 鏡味2011）とは異なり、文献・インタビュー調査や参与観察よりも、その場で生じている成員たちのインタラクションに焦点を当て、それを詳細に記録し記述するという相互行為分析の手法を用いている。野沢温泉道祖神祭りについては小島(2002), 坂口(2009)など、伝らの研究成果は榎本・伝(2013, 2014, 2015a,b)などに記されている。

### 3 調査地の特性

#### 3.1 石垣の場合

石垣の人々は、総じて自文化・言語に誇りを持っており、他地域（隣の集落など）との違いも意識している。集落ごとに風習や方言が異なり、特に中川の調査している

\* 連絡先: nakagawanatuko@gmail.com

<sup>\*1</sup> 国の重要無形民俗文化財

白保地区は、18世紀に津波が来てほぼ壊滅状態に陥り、波照間から移民を迎えたため、波照間とよく似た方言が話されている。近隣の集落（宮良や、石垣の中心地区）の方言とはほとんど通じず、他の集落の話者は白保方言を理解できないが、白保の話者は他の集落の方言が理解できるという。これは集落同士のパワーバランスを反映しており、古くから現在まで政治的に中心的であるのは四箇 (*sika*) という4集落(宮良 1995, p. 1)で、言語的にもこの4集落が他の集落に影響を及ぼしている。白保の方言にも中心地区の方言の影響がしばしば見られる。

パワーバランスの上でより優勢である沖縄本島や内地（本土）の影響も大きく、琉球諸語のほぼ全てが絶滅の危機に瀕しており、多くの地域において祖父母世代でしか話されず、子供世代では日常的に使用されることはなく、孫世代は理解することも話すこともできない。方言を流暢に話す祖父母世代においても、日本語とのバイリンガルであることが多い。しかし、ほとんど日本語しか話すことのできない若い世代も自文化への誇りを持っており、年中行事において歌われる歌などにおいて使われる方言にも慣れ親しんでいると思われる。

このような自文化・言語への誇り、多言語環境も手伝ってか、あるいは昔から様々な調査に訪れる研究者が度々いたせいか、調査されることに対する抵抗はほとんどないように感じられる。ただし、「昔は標準語励行といって、方言を話したら方言札<sup>\*2</sup>をかけて罰せられたのに、今は研究者の人が内地や外国からわざわざ来て方言を調査されるなんてねえ」といったことを言う人もいる。調査される対象になることによって、自文化・言語への誇りがより高まるということがあるかもしれない。

石垣の白保集落は、他所者の移住や年中行事への参加には比較的開放的である。白保は明治初期から、沖縄県や内地の各地からの移住者を多く受け入れてきた（白保村史調査編集委員会 2009）。近年では、地元出身の者同士が結婚することも珍しくなり、白保に住んでいる場合でも夫婦のどちらかは他所出身であることが多い。石垣の他の地域では、他所からの移住者は祭りなどの行事に参加できないところもある。また、祭りなどで使われる文句や歌を他の集落に伝えること、祭りを撮影することなどが厳しく制限される地域もあり、その点で白保は開放的であると言える。

### 3.2 野沢の場合

野沢は、長野県北部の山の中腹にある村落で、温泉とスキーで知られる。冬場を中心として多くの観光客が訪れるため、数多くの旅館・民宿がある。伝が調査対象とする人々も、自身や実家が民宿を営んでいる者が多く、それ以外にも飲食業や左官業・林業など地域に根ざした職業についている者が多い。東京近辺で働いている者もいるが、祭りの期間には野沢に帰って来る。逆に村外から野沢に働きに来る人はほとんどおらず、野沢の人たちが村外の人々と接するのは、観光客にほぼ限られる。

村内に小・中学校がそれぞれ一つずつしかなく<sup>\*3</sup>、1学年の規模も大きくないため、同級生同士の連帯感が極めて強い。観光客以外には村内の者と接する機会が圧倒的に多く、また都市部のような娯楽がほとんどないため、同級生や同僚同士で遊ぶことが多い。また、同姓の者が多いため（多くが河野・富井・畔上・森などの姓）下の名前呼び合っていることが多く、より親密さを強める一因となっている。このような連帯感や親密さがそのまま三夜講<sup>\*4</sup>を構成する基盤となる。

三夜講による準備作業（とくに1月13～15日）は、連日早朝から深夜に至るまで、雪の降る中で重い木材などを運搬したり、組み上げたりする過酷なものであり、そのつらさは、常時共在し一部始終を収録している調査チームの者も痛感している。それでも、彼らはこの祭りに携わることを楽しみにし、誇りとしている。「野沢の男たちはこの祭りに携わることは、宿命的なものとして受け止めており、この厄年行事を務めることにより、初めて村の大人の仲間入りができ、一人前として認められるとされている。」（小島 2002, p. 169）

道祖神祭りの中心は、火をつけた松明を持って社殿に突進する火付け役の攻撃に対して、25歳厄年の人たちが社殿下で防御し、それを社殿上から42歳厄年の人たちが見守るという場面である。これには「火つけに参加する者は当村住民に限る」という厳格なルールがある。したがって、都市部のイベント性の高い祭りとは異なり、観光客が祭りに参加することはできない。元来、道祖神祭りは民間信仰の神「道祖神」に根ざしたものであり、イベントではない。宗教的側面を持ったものなのである（実際、御神木伐採や社殿上棟式では神事が執り行われる）。それを「見物人」に見せるという「祭礼」の形式をとっているのである（柳田 1969=2013）。調査チーム

<sup>\*2</sup> 方言札とは、沖縄の子供が日本語（「標準語」）を話せるようになる目的で導入されたもので、主に小学校で方言を話した子供に持たされていた札である。札には、「私は方言を使いました」などと書かれていたという（近藤 2005, 猿田 2007）。

<sup>\*3</sup> かつてはもう1校ずつあったが、統合された。

<sup>\*4</sup> 「三夜講」は、ある年に数え年42歳（厄年）・41歳・40歳である3つの年齢層の男性たちによって構成され、3年間同じメンバーで活動する。各年齢層には「賣友会」「成翔会」「煌心会」といった名前が付いている。

の面々もこの祭りのそういった側面を踏まえて行動している。例えば、御神木里引きの際に、地面に横たわる御神木をまたいでほならないというルールがあるが、調査チームもそれを遵守している。

## 4 調査対象の人たちとの関わり方

### 4.1 石垣の場合

2010年以來、中川は石垣に調査に行っている。前述のとおり、開放的で入りやすい雰囲気であり、またサービス精神旺盛な文化も手伝ってか、農作業・祭りの準備などの忙しい時期であっても無理をして調査に付き合ってもらってしまっていることがある。地元の人にとって、方言と文化は一体であるようで、「方言を調べているんだったら祭りを見ないといけない」とよく言われる。2010年に初めて行ったときは何も知らなかったため、夏の一番大きな祭りである豊年祭<sup>\*5</sup>の前日に帰るスケジュールを組んでしまい、とてもがっかりされた。それ以来、夏に行くときは必ず豊年祭を見るようにしているが、豊年祭のあとは旧盆の準備に忙しくなるため、祭りは見るべきだが忙しい中調査に時間を割いてもらって無理をさせてはいけないという板挟みに苦しんでいる。

地元の人たちはとてもサービス精神旺盛であるが、「方言を教えてください」というと「自分なんかにはとてもできない」と言われることもある。これには少なくとも2つ理由があることに気づいた。1つは、方言を教えるというとは何かとても難しいことをやらされるような気になり、自分にはとてもできないと思うことが要因であると考えられる。さらに、中川は調査当初、京都大学の大学院生で、京都大学や琉球大学の教授たち、ハーバード大学の大学院生などと一緒に調査しており、「教えてあげる」ためには不適切な人たちに見えたのかもしれない。実際は世間話を収録したり、日本語を方言に翻訳したり、日本語と方言が流暢に操れる人にしかできないことをお願いしただけなので、もっと断られなさそうな頼み方を考えなければならない。

もう1つの理由は、現地の人々の方言に対する考え方にあるようだ。中川ら調査者から見れば、方言を操る人はみんな完全な母語話者に見えるが、彼らはそんな母語話者の方言の巧拙についてよく語る。例えば、方言を教わっているお年寄りの中でも最高齢に属する90歳代のお婆さんが語るところによれば、彼女の孫に頼まれて日本語の童話を方言に直したが、孫に手渡す前に、方言が上手とされている人のところへ行き、方言が合っているかどうか確かめたという。おそらくそのお婆さんも「方

言が上手」な部類であり、調査者には完全な母語話者だとは思われぬが、それでも確かめる必要があるようだ。方言の巧拙によって彼らが何を意味しているのかまだよくわからないが、「方言が上手」な人しか調査に協力してくれていないのではないかと最近感じている。しかし我々にとっては「方言が下手」な人も貴重な母語話者であるので、彼らの自然な語りも収録できる機会を手に入れたいと考えている。

調査者である中川は地元ではなく、内地の出身であり、琉球列島に侵入してきた日本語を母語とするため、また方言の話者もほぼ全員バイリンガルで日本語を流暢に話すため、媒介言語として日本語を使用している。調査者も方言を習得しようとしているが、まだ自然に話すことはできず、振る舞い・話し方などが内地風の調査者の前では、自然な談話を収録したくても、方言が自然に出てこない話者も多い。マルチリンガルの話者のコードスイッチングには、聞き手の母語や社会的な地位も関係していることが指摘されており (Ledvinka 1972, Beebe 1977)、自然な談話を収録しようとするときには調査者はその場にいらないようにするなどの心がけが必要である。マイクやカメラの存在自体が発話に影響している可能性もある。

白保を含めた石垣市全体が移民を多く受け入れ、「石垣は合衆国」であるとよく言われる。このため、様々な文化が混在しており、人付き合いで戸惑う場面もある。例えば沖縄本島に由来する人たち(石垣生まれも含む)は「出会ったら皆兄弟」のこたわざどおり、初対面でも出会った瞬間から家族のように接してくれることも多い。一方、石垣ネイティブの人たちは、そのような文化を持たないように思われる。しかし、外から来た調査者にとっては、どの人がどの由来を持つ人なのかがわからず、したがってどのように接すれば良いかもわからない。中川の場合、付き合いが長くなるに従って何となくわかっていくということはないので、文化に敏感な人(マイノリティーに多いように思われる)に出会って話す機会があればこれも調査したいと考えている。

### 4.2 野沢の場合

伝が野沢のフィールドに初めて入ったのは2012年10月のことである。以来、4年間道祖神祭りの調査を続けている。調査を始めた当初は、この種のフィールド調査に慣れていなかったこともあり、いろいろ戸惑いもした。なにより、この地域に住む特定の年代の男性のみが祭りに関わる作業・行事に参加する/できるといった、ある種の「閉鎖性」が壁を感じさせた。しかし、回数を重ねるにつれてこの壁はなくなっていった。その理由はいくつかある。

<sup>\*5</sup> 豊年祭とは、7~8月に行われる米の収穫を感謝する祭りである。

まず第一に、このフィールドに対する理解が深まったことがある。当初は、三夜講のことも、彼らの作業内容についても何も知らなかった。わけも分からず、やみくもに撮影していた。そのうち知識が増えてくると、撮影もある程度焦点化されたものになってくる。特定の人とのそばにすることが多くなるので、話しかけられたりすることもでてきた。また、作業内容に関する知識が増えると、彼らの動きをある程度予測できるようになる。道祖神祭りの準備作業はしばしば危険を伴う。重機が行き来しているし、巨大な木材を運搬したり、チェーンソーで木を切ったり、造営中の社殿の上から木の切れ端を投げ落とししたりしてくる。調査者たちが未熟だった頃はさぞ危なっかしかったことであろう。動きを予測できるようになるとみずから危険を回避できるので、「この人たちは大丈夫」といった信頼感も得られるようになる。

第二に、調査対象の人たちの調査者に対する理解の深まりというのもある。主だった作業・行事には地元のテレビ局などが撮影に来る。当初は、我々調査チームもテレビ局だと思われていた。いまでは、三夜講や祭り関係者のほとんどの方に、我々が大学から来た調査チームであることを知ってもらっている。もちろん、研究の目的や内容をきちんと理解してもらっているわけではない。それでも、彼らの活動の一部始終を収録したいのだからということはわかってきている。前述したように、この祭りの準備作業は過酷である。その一部始終をくまなく収録することもまた大変なことである。そのような調査チームの「意気込み」も、彼らの祭りへの「意気込み」に通じるところがあるのかもしれない。

第三に、繰り返し当地を訪れ、顔を合わせていると、自然と仲良くなるということがある。文化人類学や民族学におけるフィールド調査の例に漏れず、野沢の人たちとも酒を飲み交わすことによって心理的な距離が随分と近づいた。彼らの作業後の打ち上げに参加させてもらうこともあるし、作業・行事とは関係なく私的に飲む人たちもいる。とくに、調査地に入った当初から継続的に接している人たちとは仲がよい。その一方で、上の世代の人たち（前三夜講の正副委員長＝保存会）とは、個人的には距離を感じていた。それが、村内の飲み屋でたまたま出くわして、一緒に飲んだということをきっかけに、一気に距離が近づいた。

こういった経験を通じて、調査対象の人たちとのラポールを形成し、スムーズな調査を継続できている。このことは、調査者たちの撮影データにも痕跡として残っている。当初は概して遠い距離から遠慮がちに撮影しているが、慣れてくるにつけ被写体との距離が近づいていく（伝 2015）。また、調査対象の人たちも当初はカメラ

を遮らないように気づかっていたが、いまでは平気でカメラの前を横切る。そこには、自分たちの言動を記録しにきている「お客さん」という意識はない。祭りの準備をする人々とそれを収録する人々とは、いわば一体化した一つの「系」となって存在しているのである。

その一方で、彼らとの関わり合いにおいて考えさせられることもある。前述したように、この祭りは当村住民だけが参加するものであり、どれほど仲良くなっても調査者たちは部外者である。このことは普通の付き合いにおいてはほとんど意識されない。しかし、御神木伐採や御神木里引きなど観光客を含めた見物人が多くいる機会では、顕在化することがある。調査者のスキルの向上とそれまでにない映像を撮りたいという思いから、近年はしばしば、まわりから見れば「異常」とも思える位置や距離での撮影になることがある。見物人がいない状況では、我々に対する信頼から、このことが問題化されることはほとんどない。しかし、見物人が多くいる状況では問題になる。見物人から見れば我々も同じ「見物人」であり、我々の行動はともすれば他の見物人の危険な行動を引き出しかねない。それゆえ、第三者の前では、祭りに携わる者とそれを見物する者との間の明確な線引きが必要なのである<sup>\*6</sup>。その意味では、調査対象者たちとのラポールに基づく仲間意識と、調査行為自体が見物人の目にさらされていることから要請されるウチ・ソトの関係性の二重構造があるように最近を感じている。

## 5 調査結果の還元

調査結果を現地へ還元するには、何をすればよいだろうか。研究が実践と直結している（例えば医学・教育学などの）分野では、現場の人たちのためにできることは自明であるかもしれない<sup>\*7</sup>。一方、消えゆく方言の調査や伝統行事である祭りの撮影などが実践にどう結びつくのかは自明ではない。また、筆者らのフィールドは発展途上国でもなく、現地の人々は、薬がなくて困っていたり、適切な教育を受けることができないわけでもない。よって、熊谷（2013）、門司ほか（2015）のように、現地の人々の手助けを必要としているわけでもない。

筆者らの場合、問題点はより抽象的あるいは観念的であるように思われる。筆者らのフィールドは村落部（いわゆる「田舎」）である。一般には、都市部は優れていて村落部は劣っていると考えられている。筆者らに投げかけられる、わざわざこんなところに何を調べに来ている

<sup>\*6</sup> このことは、比較的付き合いの長い、三夜講のある方に実際に指摘していただいた。

<sup>\*7</sup> しかし、「役に立つ」ことが自明に思える分野でも、改めて現場への還元が提唱されていることから、ここでも研究と実践の乖離は存在することがうかがわれる（例えば熊谷 2013、志水 2001）。

のか、こんなことを調べて何になるのかといった地元の人たちの疑問の中にも、自分たちの言語・文化の価値をどう評価してよいのかわからない感じが感じられる。それでも、彼らが自分たちの言語・文化に誇りを持っていることは間違いない<sup>\*8</sup>。

それでも、石垣の人々、特に若者は、その多くが地元を離れて、進学・就職・結婚のため内地や沖縄本島に住んでいる<sup>\*9</sup>。野沢でも状況は同じで、近年は東京近辺に就職する者も多く、若い世代での地元居住者も出生率も著しく減少している<sup>\*10</sup>。このような状況で、自分たちの子孫に言語・文化を伝えることは困難、あるいは不可能だろう。誇りを持っていても、その誇りが子どもたちに伝えられないのはつらく悲しいことである。

フィールドワーカーは、このような人々に何ができるだろうか。Hale (1992a,b), Bradley & Bradley (2002), Chelliah & de Reuse (2011) などによれば、言語学のフィールドワーカーの責任として、辞書・談話集・参考文献を出版し、それによって地域の人たちが知識を継承したり学んだりできるようにしておくべきであるという<sup>\*11</sup>。琉球列島における言語と文化の保存・継承の試みは田窪 (2013) などで紹介されている。また、ひらがなでは書きづらい琉球諸語の書記体系を提案した小川 (2015) もある。

言語だけでなく文化も、それを記録し論文などにまとめることにより、同様のことはできるだろう。実際、文化人類学・民族学や社会学などにおける調査研究はエスノグラフィーという形で成文化され、我々はそれらを通じて、あまり知られていないさまざまな文化に触れることができる。しかし、そのことが文化の継承に直接結びつくわけではない。俵木は古家ほか (2009) の中で、山村部での祭りの担い手が少なくなり、その伝承が困難になっている現実を嘆き、「このような現実、民俗学と

いう学問の成果は何らかの貢献を成しうるだろうかという問いは、今でも筆者の中に未解決のまま燻っている」(p. 50) と述べている。そして、結果としていまある「祭りの姿」だけを調査研究の資料として対象化するのではなく、祭りや芸能の準備や稽古の過程を含めた、ダイナミックに祭りが作られる「実践の場」を対象とすべきであり、「[そのような] 実践がある限り、いつでも、どこにでも祭りという現象は存在する」(p. 101) と述べている。

筆者らのフィールドワークに共通しているのも、現地の人々の生の声や姿を「できごと」として収録していることである。これらのデータはたんに研究者や第三者にとって有用であるという以上に、現地の人々にとっても有用なのではないだろうか。彼らは自分たちの言語・文化を誇りに思っているけれども、どこがどうすごいのか説明できない。我々のデータによって、彼らが自分たちの言語・文化を客体化し、彼ら自身にその価値を再認識してもらうことが成果還元の一つの姿だと思う。そうすることによって、彼ら自身の中で自分たちの言語・文化を継承しようという気持ちがより強くなれば、研究者と地元の人々が一体化した、「嬉しい」フィールドワークになるのではないだろうか。

#### 謝辞

調査に協力いただいている石垣市の方々、野澤組ならびに三夜講の方々に感謝します。石垣市の調査は、狩俣繁久氏、田窪行則氏を含む科研プロジェクト(研究課題番号: 24242014) による支援によって実施されています。また、共に調査をすることが多いクリストファー・デビス氏、タイラー・ラウ氏から多くのことを学んでいます。野沢温泉村の調査は、榎本美香氏を代表者とする科研プロジェクト(研究課題番号: 15H02715) による支援によって実施されています。調査チームのメンバーからは収録や議論で多くの協力を得ています。

#### 参考文献

- Beebe, Leslie M. (1977). The influence of the listener on code-switching. *Language Learning*, 27 (2), 331–339.
- Bradley, David, & Bradley, Maya (2002). Introduction. In Bradley, David, & Bradley, Maya (Eds.), *Language endangerment and language maintenance*, pp. xi–xx. London: Routledge.
- Chelliah, Shobhana L., & de Reuse, Willem J. (2011). Fieldwork ethics: The rights and responsibilities of the fieldworker. In *Handbook of descriptive linguistics*, pp. 139–159. Berlin/New York: Springer.
- 伝康晴 (2015). 心の間合い: フィールド撮影データに見

<sup>\*8</sup> 2016 年道祖神祭りの御神木里引きにおける委員長の挨拶は、「ほんとうに野沢の男でよかったと思ってます。この誇りを胸に三夜講最後の道祖神祭りを思いっきり楽しみ、そして最高に煌きたいと思えます」であった。

<sup>\*9</sup> 沖縄本島以外の島には大学がなく、高校がない島も多い。また、他の地方と同じく、就職する場が著しく限られている。

<sup>\*10</sup> 数年後には、三夜講の構成員が祭りの担い手として必要な人数に足らなくなることが危惧されている。

<sup>\*11</sup> Bradley & Bradley (2002) は言語学・倫理・科学・象徴の4つの点で危機言語の記述は重要であると主張する (pp. xi–xii)。

1. 言語学的観点: 言語の多様性(今まで知られていなかった構造・変化などがあるかもしれない)の点で重要。
2. 倫理的観点: その言語の話者の子孫が言語に触れ、知識・文化を継承できるようにすべき。
3. 科学的観点: それぞれの地域が独自の環境の中に住み、独自の知識を持っているので、その知識を保存すべき。彼らの知識の中にはまだ知られていない貴重な知識も含まれるかもしれない。
4. 象徴的観点: 言語はアイデンティティの一部である。

- るラポール 日本認知科学会「間合い」研究分科会, **JCSS SIG Maai, 2015** (1), 7–12.
- 榎本美香・伝康晴 (2013). 文化伝承を支える多世代協働インタラクショナルにみられる「指揮」と「指導」の分析 日本認知科学会第 30 回大会発表論文集, 122–131.
- 榎本美香・伝康晴 (2014). フィールドにおける「指揮」の相互行為的達成 日本認知科学会第 31 回大会発表論文集, 515–520.
- 榎本美香・伝康晴 (2015a). フィールドに出た言語行為論: 「指令」の事前条件達成における相互行為性・同時並行性・状況依存性 認知科学, **22**, 254–267.
- 榎本美香・伝康晴 (2015b). 共同体<心体知>の経年的変化に関する分析～相互行為データと当事者の内省的叙述を手がかりに～ 日本認知科学会第 32 回大会発表論文集, 1010–1019.
- 古家信平・俵木悟・菊池健策・松尾恒一 (2009). 日本の民俗 9: 祭りの快樂 吉川弘文館
- Hale, Kenneth L. (1992a). Language endangerment and the human value of linguistic diversity. *Language*, **68** (1), 35–42.
- Hale, Kenneth L. (1992b). On endangered languages and the safeguarding of diversity. *Language*, **68** (1), 1–3.
- 石垣繁 (1971). 八重山・白保方言の研究: その音韻、アクセントについて 沖縄文化, **9** (1–2), 88–96.
- 鏡味治也 (2011). 国内フィールドワーク 鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工 (編) フィールドワーカーズ・ハンドブック, pp. 61–86 世界思想社
- 小島宗一 (2002). 野沢温泉の道祖神祭り 笹本正治 (監修)・いいやま博物館友の会 (編) 奥信濃飯山発火祭り: 火祭り文化考, pp. 165–194 ほおずき書籍
- 近藤健一郎 (2005). 近代沖縄における方言札の実態: 禁じられた言葉 愛知県立大学文学部論集 (国文学科編), **53**, 3–14.
- 熊谷圭知 (2013). かかわりとしてのフィールドワーク: パプアニューギニアでの試行錯誤的实践から *E-journal GEO*, **8** (1), 15–33.
- Ledvinka, James (1972). The intrusion of race: black responses to the white observer. *Social Science Quarterly*, **52** (4), 907–920.
- 宮良信詳 (1995). 南琉球八重山石垣方言の文法 くろしお出版
- 門司和彦・福士由紀・中川千草・寺田匡宏・菊地直樹 (2015). 感染症の危機管理と研究者の役割 (座談会) 地球研ニュース, **52**, 2–5.
- 中川奈津子・ラウタイラー・田窪行則 (2015). 琉球八重山語白保方言の音韻 狩俣繁久 (編) 琉球諸語 記述文法, **I**, pp. 1–21 琉球大学
- 中川奈津子・ラウタイラー・田窪行則 (印刷中). 八重山語白保方言の文法概説 狩俣繁久 (編) 琉球諸語 記述文法, **II** 琉球大学
- 中本謙 (1999). 八重山白保方言の音韻 内間直仁 (編) 琉球方言音韻・文法・語彙の研究: 周辺諸方言との比較研究も含めて, pp. 3–15 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 小川晋史 (編) (2015). 琉球のことばの書き方: 琉球諸語 統一的表記法 くろしお出版
- 坂口香代子 (2009). 野沢温泉の道祖神祭り: 伝統ある火祭りを支える現代版「三夜講」 中部圏研究, **169**, 33–48.
- 猿田美穂子 (2007). 標準語励行の実態と人々の意識: 方言札に着目して 島村恭則・日高水穂 (編) 沖縄フィールド・リサーチ, pp. 160–168 秋田大学教育文化学部
- 志水宏吉 (2001). 研究 vs 実践: 東京大学大学院教育学研究科紀要, **41**, 365–378.
- 白保村史調査編集委員会 (編) (2009). 白保村史
- 田窪行則 (編) (2013). 琉球列島の言語と文化: その記録と継承 くろしお出版
- 柳田国男 (1969–2013). 日本の祭 角川学芸出版